

小説 「ストライキの夜」 下巻

駿唐地 恒抄

(株) 恒抄出版

小説 ストライキの夜 上巻 の紹介

一九八八年創業の、アーバンリゾート・ホテル。バブル景気と呼ばれた好況時、正常な労使関係を築き上げてきたホテルが、平成不況の春闘の中、突如としてその労使関係は崩れ、組合員四二八名による二四時間全面ストライキに突入した。ストライキ経験など無い、今時の若い世代のスタッフの言動と、やはりストライキの経験がない管理職の動揺を辛辣に描いた、フィクション。

五 膠着

頭ひとつ抜きんでていた。

前に座る委員長、氏本の後ろ姿は、長時間にわたり幾度と無く繰り返される交渉に疲れていると感じた。繰り返されるのは同じ言葉。沈黙の間隔が長くなっている。あせっていた。二十四時間全面ストライキに突入して、六時間近くが経過しようとしている。何とか今日中には集約方向に向かわなければ、組合員はともかく、このホテルはもたない。スト権を取ってから、闘争本部長という肩書きに変えられた、組織部長の染田は、交渉の行方よりも、自分の本職である、調理部の状況を考える時間の方が長くなった。

「私たちは、基本的に x 連動を認めたではないですか。総支配人も、予算の売り上げには自信があるとおっしゃっている。それなのに、なぜ、最低 x 部分の x ケ月に拘られるのか。今までの労使交渉の歴史を、定見として考えてもらいたい。ほんの 0. 何ヶ月に拘って、ストライキを続けさせることが、このホテルにとってどういう意味を持つのか、理解されているか？」

沈黙と総支配人の重いため息が、会議場を満たす。

疲れているとはいえ、氏本の気は満ちていた。机を叩くような芝居じみた事をしなくても、充血した目に宿る気概は他を圧倒するに十分な力を放っていた。

二〇〇×年 四月 日 午前十二時五十五分
プラトン東京ベイ 地下一階宴会場 「桜の間」

「ねえ吉崎。何で、組合の速報って、ハードボイルド調なんだろうっかね？」

「知らねえよ。新聞書いてるとか言ってた、執行委員の、なんて言ったっけ、羽田さんだっけ、あの人の趣味じゃないの」

「頭ひとつ抜きんでいた・・・っつって座高たかいだけじゃん」

「シツ。後藤声デカイよ。委員長気にしてるらしいぞ」

「アツそう。まあいいけどさ」

「おまえがいいけどってこたあねえだろ。しかし、疲れたなあ。俺、今日中番だから十時あがりなのにもう一時だぜ。もうすぐ団交終わるから報告聞いてから帰った方がいいって言うから待ってたのに、また決裂って。なにそれ。って感じじゃない」

「だよな。俺も遅番シヨートだから十二時あがりなのに、もう一時間もサー

ビス残業だよ」

「組合で残業つてこたねえーだろ」

「そりゃそうだけど、今日一日働いたじゃん。正面玄関行って旗振ったり。弁当買い出しに行ったり」

「でもおまえ、なんかノリノリだったじゃない」

「制服着て、正面玄関の外で旗振るなんて、ふつう出来ないよ。面白れーじやん」

「面白れーって。おまえどさくさに紛れて、×って叫んだべ。マジクビになるよ」

「でも、怒ってたねえ村山社長。後ろで半ベソかいて謝ってた内田支配人と、太田マネージャーが、哀れで・・・」

「笑いながら言っつなよ」

「それに、『クビをかけるのは私だけでいい』とか委員長言ってたし。染田闘争本部長も『暴力は絶対ダメ。だだけど声は大きく。でお願いします』とか言っ

「たじやん」

「でも、何でも叫んでいいとは言ってねえーよ」

「はいはい。まあとにかく疲れた帰りにえー」

「もう帰っていいんじゃないかな。かなり人数減ってるよな」

「うん。一応定時までには、指示があるまで宴会場から出るなって言っただけど過ぎてるし、報告も聞いたし」

「俺、中山さんに聞いてくるよ」

「ああ」

六 オープンの夜

同日 午前二時十分

同ホテル 一階ラウンジ 「レイ・ラウンジ」

「痛ッ」

「どうした？」

「グラスがチップしてて、手切っちゃいました」

「たのむよ太田。このままスト続いたら、明日の、ていうかもう今日だけど、朝食も俺たちだけでやんなきゃいけないんだから、おまえに怪我されたら、どうしようもなくなっちゃうよ」

「すみません支配人。でも今日も朝から働いてて、もう二時過ぎですよ、いくらなんでも十七時間も働いたらいいかげん死にますって。それにこのままラウンジの朝食やれっていうなら、自殺しますよ。やっとダイナーの片づけが終わったのに」

「死にそうなのは俺も一緒だよ」

「朝食セットはバイト君呼びましょうよ。夜中でもたたき起こせるやつ何人居ますから」

「バカ、あのねストライキ對抗の為の臨時増員は法律に引つかかるの。おまえバレたらクビ飛ぶよ」

「ウゲツ。そうなんですか。じゃ、死ぬかクビか、どっちかですね」

「おまえもおおげさだねえ。オープンの時の夜を思い出せよ。毎日こんな感じだったじゃない」

「でもね支配人、お互い十五位若かったんですよ」

「嫌なこと言うねえ。とにかくやるしかないんだから、早く朝食セット終わらせてちよつとでも休んどころ」

「オープンの時は、これ終わって毎日酒盛りだったけど、今考えたらゾッとしますね」

「しかしこの時代にストとは、信じられない事しますね。俺が組合員の時も何回かやりそうなことはあったけど、どうせ最後はまとまるんだって思ってたけど本気でやるとはね。フランスとかじゃしよっちゅうだけ」

「また、おまえ。最初のほうのせりふは聞かれたら不当労働行為だって言わ

れるぞ」

「おっと。気を付けましょう。しかし疲れた」

「俺のほうが疲れてるよ」

「俺のほうが絶対疲れてますよ」

「うるさい。はやくやれ」

「.....」

同日、午前二時三〇分

駅前 × ラーメン店のカウンター

「おまえ明日何番？」

「明日は早番。もう寝ないよ」

「おまえ休みでしょ」

「そうだけど」

「しっかし疲れたね今日は。なんか、執行委員の人たちもテンパってて、おまえが中山さんに聞きに行かなかつたら、帰れなかつたかもしれないよな」

「ほんとだよな。でもさあ、あの人たちこれからまた交渉やるんですよ。『朝までかかっても解決します』とか言ってたし。大変ちゅうあ大変だよな」

「しっかし大丈夫かね、うちのホテル。ほんとにやっちゃう組合もスゲーけど、会社もあとちよつとなんだから出しあーいいじゃんね」

「その、あとちよつとを出してりゃ、はじめから無かつたんじゃねえ。ストなんか」

「あ、そうか」

「よくわかんねーなあ。難しいわ」

「でもさ、日本のホテルでのストライキは三十年ぶりだってね」

「へーそうなんだ」

「って言うか、書記長がそういつてたじゃん。なに聞いてんだよ後藤」

「偉そうに言うなよ。おめーだって、弁当二つも喰ったじゃねーかよ。そんなまたラーメン食うのかよ」

「関係ねーだろ」

「しっかしさ、前にテレビで見たけど、昔はストっていったら何日も会社や工場に寝泊まりして、シユプレヒコール！とかなんとかってやってたらしいけど、俺ら、帰っていいってさあ、今は随分ドライなのかなあ？」

「さあ？執行委員の人たちも初めてで、いちいち話し合ってたからなあ」

「だよねえ。みんな、泣きそうな顔してたもんな」

「だよねえ。偉そうにスト命令！とかいってさ、自分達が一番泣きそうなんぢゃんね」

「だよねえ。賃上げとかボーナスとかさ、ここまですないともらえない時代なんかね」

「お客さん！早く食わないと、伸びちゃうよ」

「・・・」

七 統制

同日 午前三時四十分
ホテル宴会場 「桜の間」

書記長。やっぱ満額ですよねえ」

「おまえバカか、下島。おまえも職場委員やってたんだろ。この期に及んでそんなこと言ってるから、委員長が頭抱えちゃうんだよ。これから執行委員会やるから、パテーションの外に出ろ」

「でたでた。逆ギレ！職場委員のほうが偉いんだぞって、いつも言ってるくせに、これだよ」

「うるさい！みんな気が立ってんだよ、おまえだけ賃下げするぞ」

八 切齒扼腕

(あとがき)

最後に、章の八の、題名だけ書いて、ここで脱稿します。
この小説に、結論はありません。

なにを、どう受け止めてもらえたかは、それぞれでしょうが、この先は自分で考えてもらいたいと思います。